

「たかたのゆめ」生産までの歩み

「たかたのゆめ」は、東日本大震災がなければ生まれなかった。被災から1年後の平成24年春、社会貢献の一環として提供を受けた「お蔵入り」の品種を、浸水を免れた水田で育て始めたことが、生産への第一歩となった。発災直後は絶望に覆われた被災水田だったが、復旧工事が着実に進み、農地としての機能を取り戻した。新たなブランド米は、復旧水田に希望の種をまく役割も果たした。



大区画化された農地で田植えを行うサンファーム小友の関係者

より、農地復旧と合わせて大区画化が進められ、本年度から作付けが可能となった。合わせて、昨年3月には農事組合法人サンファーム小友（石川満雄組合長、328組合員）が設立された。



平成23年3月11日、小友地区は両側の海から大津波に襲われた

●15㍓の水田から

震災前は「いわた13号」という名前が付けられていた「たかたのゆめ」。もともとは、日本たばこ産業(株)(JT)が約20年前から静岡県内で開発を進めてきた品種だった。

粘りや食味の良さに定評がある「ひとめぼれ」はいもち病対策が課題だったことから、病虫害に強い「いわた3号」を交配。東北でも栽培研究が進められ、10年以上前には生産化のめどがあった。

しかし、その後は新たな品種として作付けされることなく、JTが保管を続けていた中、震災が起きた。JTは社会貢献の一環で市への支援を決め、種もみを提供した。

幾多の困難を乗り越えてきた被災地・陸前高田で生産され、地域復興の思いが込められた新ブランド米として成長を遂げた。夢を結実させるための第一歩をどう踏み出すか。市とJTを結びつけるなど、実現には震災以降積極的に市内食材の販路拡大などを図っている事業コンサルタントの向ビッグアップル(関欣哉代表取締役、本社東京都)が尽力した。

生産・管理を続けていた。収穫量1124㍓から、種もみなどを確保。市では合わせて、名称を全国から公募。169案が寄せられた中から「被災地からみんなで夢を追いかけて、夢を乗せ、希望を乗せた名前である」として「たかたのゆめ」が選ばれた。

25年度は12人の認定農業者ら

●復旧田で飛躍的に

により、初めて一般販売に向けた田植えが行われた。面積は10・5㍓で、収穫量は33・7㍓。全農などを通じて出荷されたほか、首都圏の高級百貨店などにも並べられた。

本年度は市内21農家、3団体に、作付面積は54㍓にまで増加。本格的な普及拡大への基盤が整った。収穫量が飛躍的に増えた要因には、水田の復旧に加え、震災後に生まれた農業組合法人の存在がある。

沿岸部に水田が広がる小友地区。広田半島の付け根部分に位置する同地区は、東側は大野湾、西側は広田湾に挟まれる。震災では両側から大津波が襲来し、甚大な被害を受けた。県の復興基盤総合整備事業に

より、農地復旧と合わせて大区画化が進められ、本年度から作付けが可能となった。合わせて、昨年3月には農事組合法人サンファーム小友（石川満雄組合長、328組合員）が設立された。

ほ場所有者の組合員と法人が賃貸契約を結び、耕作は地区内外の担い手と連携して行う。担い手と組合員相互の所得向上や、耕作放棄地を出さない持続的な地域農業などを見据えている。

区画整理は90㍓で行われ、本年度はのうち87㍓で田植えを行った。約30㍓は「たかたのゆめ」1、50㍓は「ひとめぼれ」、残りは飼料米などを育ててきた。震災直後、同地区農地一帯はがれきに覆われたほか、地盤も沈下。三陸沿岸道路整備事業や防災集団移転促進事業の発生残土96万立方メートルを用いて、かさ上げが行われた。土質を慎重に見極めながらの生産管理が続いたが、本年度は豊作に恵まれた。

9月、箱根山の展望台から田を見下ろすと、黄金色の稲穂が両側の海をつないでいた。4年ぶりに、豊穣の輝きが戻った。陸前高田市ではこれまで漁業だけでなく、農業も盛んに行われてきた。しかし震災前は決して順風満帆とは言えなかった。増加傾向の耕作放棄地、担い手不足、大型機械化への対応、効率性向上など、さまざまな課題を抱えていた中での被災だった。農業復興に向け、単に爪痕を消すだけではなく、震災前の実情にも向き合わなければならぬ。

区画整理を組み合わせた被災農地での集落営農は、地域課題克服と農業復興のモデルとして注目を浴びる。「たかたのゆめ」はさらに、陸前高田でしか生産されない品種として差別化につながる。

生産に加工や販売などを組み合わせて振興策を図る6次産業化を考えていく中でも、独自ブランド米は核になり得る。被災から立ち上がる陸前高田の農業に、新たな可能性が生まれた。



米崎町の民家の庭先にある小さな水田。金野さんがこの場所で生産し、陸前高田での「たかたのゆめ」ブランド化が始まった

「お蔵入り」の品種に光

種もみ確保、復旧水田で大規模生産



震災1カ月後①と2年後の小友地区農地。がれき撤去、地盤沈下への対策など、復旧までに多くの困難を乗り越えた

ゼロから育み